

体育学・スポーツ科学連携大学院 教育プログラム開発プロジェクト

令和 7 年度 プロジェクト実施報告書



鹿屋体育大学

ご挨拶

本報告書は、文部科学省の補助を受けて平成 25 年度から取り組んできた「体育学・スポーツ科学連携大学院教育プログラム開発プロジェクト」の令和 7 年度の内容をまとめたものです。本プロジェクトは「身体教育とスポーツ科学の高度な専門的知識を備えた指導者を育成すること」を目標として、本学大学院博士後期課程をコアに九州等の各国立大学間で連携を組み、大学間での研究指導・講義、研究セミナー、共同講義などによって「体育学・スポーツ科学」の連携教育プログラムを推進しております。

今年度はこれまで取り組んできた活動内容の継続を中心に行ってまいりました。活動内容としては、体育学・スポーツ科学連携大学院教育プログラムワーキング会議、同開発委員会、同協力者会議を定期的に開催し、連携校の拡大に係る検討、連携大学院交流会の開催、本教育プログラムの入試説明会、ホームページの更新等取り組んでまいりました。特に、本年度は、連携大学院の交流会の実施時期を他の発表会の時期を考慮して年度末に移しました。そのことで、大学院 1 年生の論文構想発表と重ねた形で実施することができました。また、ホームページの更新として、連携大学院論文博士取得支援プログラム修了生の声を載せました。今年度は修士課程の連携教育プログラム（本学、熊本大学、宮崎大学）を開設し、その中での共同講義として「身体教育特講Ⅰ」「身体教育特講演習Ⅰ」のオムニバス科目を集中講義形式で 1 名の学生を対象に、遠隔と対面の両方式で開講しました。さらに、今年度も昨年度と同様に連携大学の拡大として現在数校の大学との協議を進めており、修士課程・博士後期課程の拡大を行っております。今年度も本プロジェクトが滞りなく進めることができたのは、本学、熊本大学、宮崎大学、鹿児島大学、福岡県立大学の各大学で本プロジェクトを支えていただいた皆様のおかげだと思っております。この場をお借りして心からお礼を申し上げます。ありがとうございました。

最後になりますが、第 4 期中期目標・中期計画が 5 年目に入り、本プロジェクトも干支を一回りし、13 年目を迎えました。今後はさらに、大学院教育のあり方に関して、大学院改革が望まれる中、新たな大学院のあるべき姿につながるように、日々挑戦していくことが、本連携大学院教育プログラムが地域教育の中核、大学教育の再生として機能していくために必要なことと考えます。そのためにも今後とも連携を結んだ各大学が互いの質を高めるために切磋琢磨していかねばなりません。次年度も本プロジェクトに基づく連携の活動に関してさらなるご理解とご支援を賜りますようお願いいたします。



体育学・スポーツ科学連携大学院教育プログラム開発プロジェクト
プロジェクト長 鹿屋体育大学
森 司朗

目次

目 次

1. 事業概要	1
1-1. プロジェクト全体の概要	1
1-2. プロジェクト設置の背景・必要性	1
1-3. プログラムの目的と特色	3
1-3-1. 目的	3
1-3-2. プログラムの特色	3
1-4. 事業実施体制	7
2. 活動状況	8
2-1. 令和7年度の主な実績	8
2-2. 令和7年度連携大学院共同講義	10
2-2-1. 修士課程連携教育プログラム	10
2-3. 連携大学院教育プログラム交流会	18
2-5. 委員会報告	26
2-5-1. 令和7年度の事業体制	26
3. 令和8年度事業実施計画	30

1. 事業概要

1. 事業概要

1-1. プロジェクト全体の概要

本事業「体育学・スポーツ科学連携大学院教育プログラム開発プロジェクト」は、設立時は九州地区の教育学部に体育系の大学院（修士課程）を有する地方国立大学が協力体制を構築することで、学際的・複合的な知識や実践力を身につけた人材を育成することを目指し、プロジェクトを開始した。

我が国で唯一の国立4年制体育大学である鹿屋体育大学の大学院体育学研究科を中心として、複数の大学（熊本大学、鹿児島大学、宮崎大学、福岡県立大学）の大学院の各研究科が連携・協力して学際的・複合的かつ一貫した指導体制のもとでの体育学文化に特化した指導と体育・スポーツに関する大学院教育を行うことで、九州地区において、高度な専門的知識と豊かな学識を有し、国際的かつ高度な専門的指導者を育成することを目的としている。

1-2. プロジェクト設置の背景・必要性

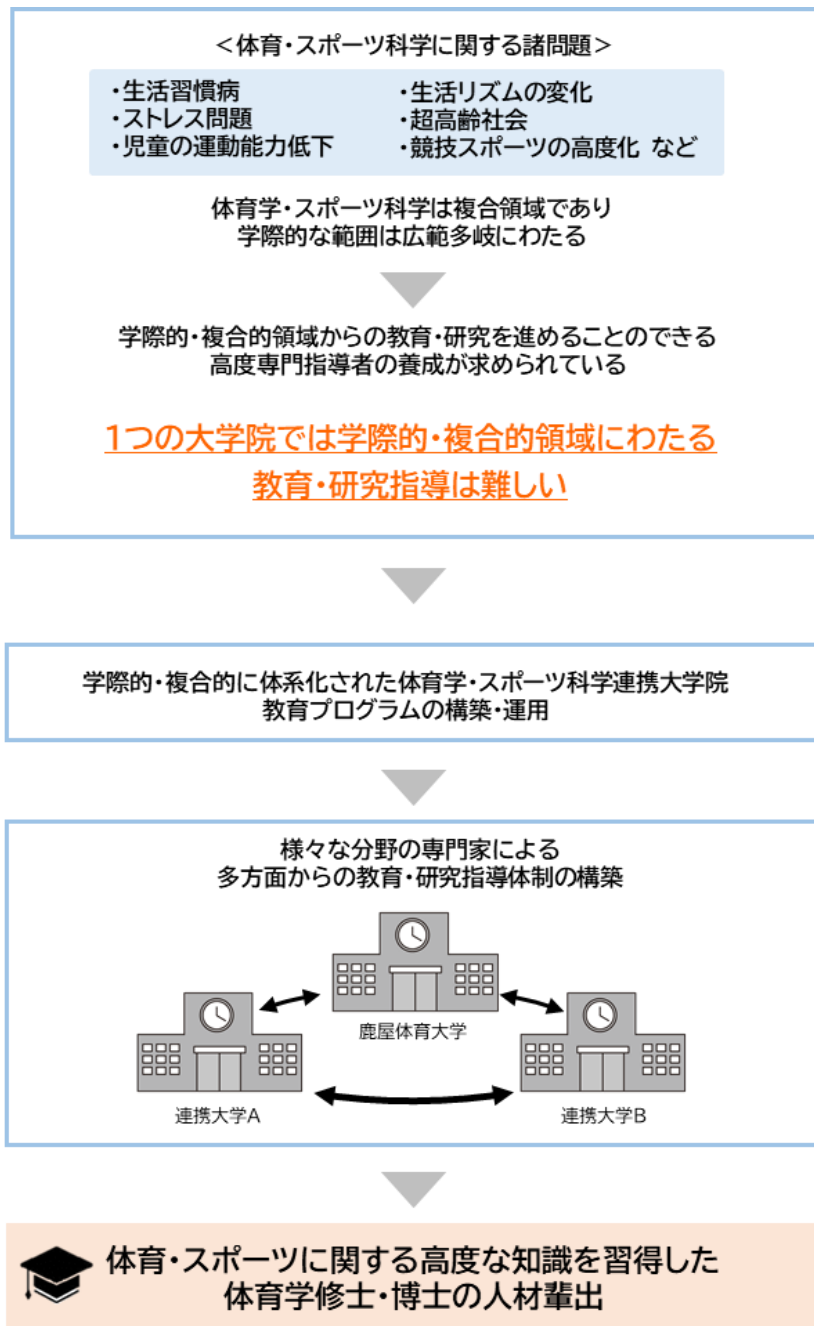
生活環境が日々変化する現代社会では、運動不足による生活習慣病やストレス、生活リズムの変化、超高齢社会における福祉など、人々の健康や生きがいに影響を及ぼす様々な問題が指摘され、国民の健康の維持・増進対策が重要になっている。競技スポーツに対する国民の興味、関心は高まっており、今後優れた選手の育成や高度な指導力を有する指導者の養成も引き続き求められている。

このような背景から、国民の健康の維持・増進、さらに福祉や競技スポーツの発展等の課題を解決するためには、体育・スポーツ・健康の3つの分野を包括した、より学際的かつ複合的な視点からの取り組みが必要である。このような現状において、鹿屋体育大学を含む体育・スポーツ・健康系の研究科を有する大学院では、それぞれの大学教員の授業や研究指導のもとに高い資質を持つ研究者や指導者の育成を目指してきたが、1つの大学のみの指導よりも、複数の大学がお互いに不足する領域を補うよう連携して教育・研究指導を行う（内容の複合性）方が、より効果的に高度な資質をもつ人材を育成できる可能性が高まると考えられる。

一方で、体育・スポーツ・健康にかかわる仕事に就きたいと考える学生の多くは、修士課程や博士後期課程を通じて、同一の指導教員から一貫した教育・研究指導を受けたい（指導・研究の一貫性）

と望んでいる。しかし、在籍する大学では修士課程から教職大学院への移行や博士後期課程を持たないことにより進学を断念するケースも見受けられる。このような背景の中、体育・スポーツ・健康の学際性・複合性を積極的・効果的に活用して、研究・実践を担っていく研究者・実践者の養成を可能にする新たな教育・研究指導システムの構築が必要と考える。

<体育学・スポーツ科学連携大学院教育プログラム全体の概要>



1-3. プログラムの目的と特色

1-3-1. 目的

九州地区において、体育・スポーツ・健康に関する学術的・複合的な知識や実践力を身につけた人材を育成するために、学際的・複合的かつ一貫した指導体制のもとで教育・研究指導を可能にする修士課程、博士後期課程が必要となっている。つまり、1つの大学に所属する特定の領域を専門とする教員のみでなく、他の大学に所属する他の様々な領域を専門とする教員が連携しながら教育・研究指導を進めていくことが効果的であると考えられる。そこで、鹿屋体育大学では修士課程、博士後期課程の大学院生に対し、既存の教育プログラムの拡充を狙い、新たな教育・研究指導を提供する連携大学院教育プログラムを提案してきた。

この連携大学院教育プログラムでは、「体育・スポーツ・健康」の諸科学を包括的に捉え、学際的・複合的に研究を推進し、研究成果を社会に還元していくための高度な専門的知識を備えた人材(高度専門職業人)を養成し、修士(体育学)、博士(体育学)の学位取得を目指す。

1-3-2. プログラムの特色

本教育プログラムにおける研究指導では、いずれの課程においても、複数の大学に所属する専門分野の異なった教員が主指導教員と副指導教員になり、博士後期課程、修士課程の院生に対する教育・研究指導を行う。これにより、幅広い領域を包括した指導体制が構築され、充実した高度な研究活動を実現できる。

【博士後期課程の指導体制】(次ページの図参照)

(パターン1) 鹿屋体育大学大学院体育学研究科の教員が主指導教員を引き受ける。

(パターン2) 連携大学所属の指導教員が主指導教員を引き受ける。

【パターン 1】連携大学所属の指導教員が主指導教員を引き受ける

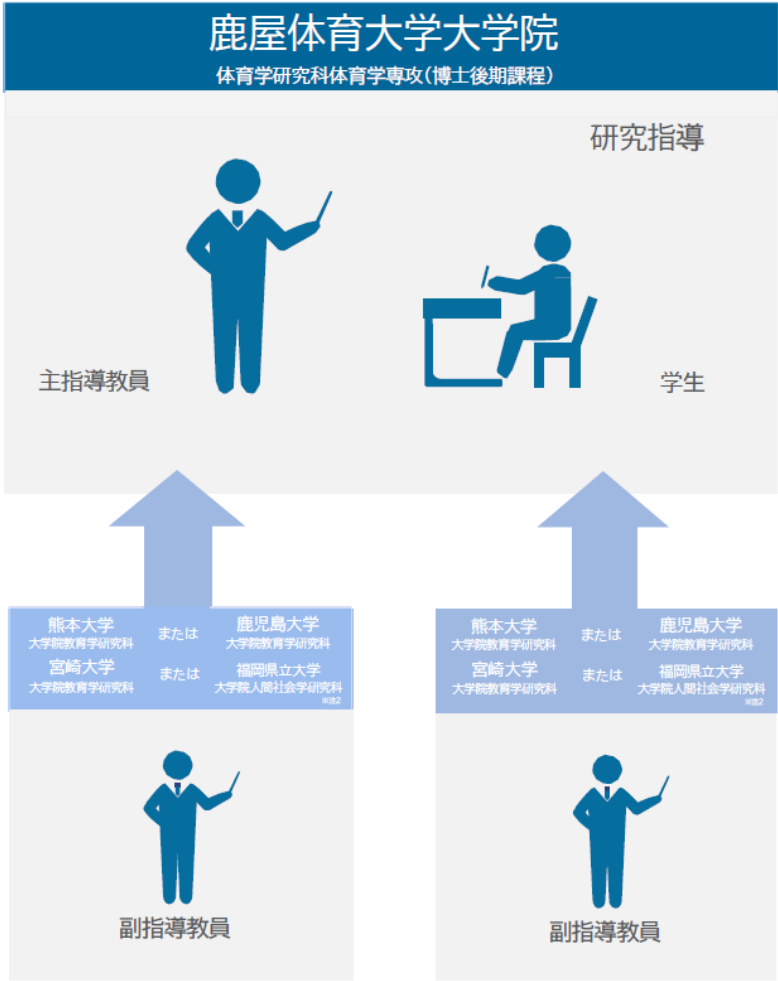
連携大学に所属する主指導教員及び、鹿屋体育大学に所属する副指導教員から教育・研究指導を受けて博士号取得を目指す。



※注1) 副指導教員には鹿屋体育大学の教員を必ず1名以上含むこと

【パターン 2】鹿屋体育大学大学院体育学研究科の教員が主指導教員を引き受ける

鹿屋体育大学に所属する主指導教員及び、連携大学に所属する副指導教員から教育・研究指導を受けて博士号取得を目指す。



※注2)副指導教員に鹿屋体育大学の教員を含んでも構わない

【修士課程の指導体制】

教育体制の特色

複数大学に所属する専門分野の異なった教員が指導教員(1人)と副指導教員(2人以内)となり、学生に対する教育・研究指導を行う

1年次の指導体制



- 鹿屋体育大学修士課程学生として入学し、遠隔講義システムを利用して連携大学において授業を履修(連携大学の教員も一部の科目を担当)
- 論文指導は、1年次は鹿屋体育大学の教員が行う

2年次の指導体制(連携大学院方式)



- 組織的な研究指導委託体制として、主指導教員を連携大学の教員に変更し、対面にて論文指導を実施
鹿屋体育大学教員は副指導教員として遠隔にて論文指導を実施
- 学位論文審査は、連携協定校の主指導教員を加えた審査体制で実施
- 修了判定は鹿屋体育大学の規則に基づき実施し、鹿屋体育大学の学位(修士(体育))が授与される

1-4. 事業実施体制

本プロジェクト推進のため、本学教員から構成される「ワーキンググループ」と「体育学・スポーツ科学連携大学院教育プログラム開発委員会」、ならびに各連携大学に所属する参画可能な教員を加えた「体育学・スポーツ科学連携大学院教育プログラム協力者会議」を定期的に行い、連携校の拡大、参画教員の充足、連携大学院教育プログラム交流会（以下、連携大学院交流会という）、修士課程の連携等について検討した。

2. 活動状況

2-1.令和 7 年度の主な実績

2. 活動状況

2-1. 令和 7 年度の主な実績

令和 7 年度の本プロジェクトの主な実績は以下の通りである。

<令和 7 年度 活動概要>

日 付	内 容
8 月 5 日	宮崎大学にて大学院生向けの本教育プログラムの進学説明会を実施
9 月 16 日	熊本大学にてオンラインによる社会人向けの本教育プログラムの進学説明会を実施
7 月 25 日～ 9 月 16 日	共同講義「身体教育特講Ⅰ」「身体教育特講演習Ⅰ」を夏季集中で開講
4 月 8 日～ 8 月 1 日	「身体教育特講Ⅱ A【KR】」「身体教育特講Ⅱ B【KR】」を開講
10 月 2 日～ 2 月 13 日	「身体教育特講演習Ⅱ A【KR】」を開講
3 月 5 日	連携大学院交流会を学位論文構想発表会と併催。 対面・リモートのハイブリッド形式で実施

<体育学・スポーツ科学連携大学院教育プロジェクトの実績>

令和 7 年度 連携大学院教育プログラム

これまでの主な事業実績

本年度の主な事業実績

【平成 25 年度～令和 6 年

<組織体制整備, 教育プログラム開発>

- ・大学間の連携体制の整備
- ・連携共同講義体制の構築
- ・連携大学間での研究指導体制の構築
- ・国内外連携大学院調査
- ・連携校拡大に関する業務

<教育プログラムの運用

- ・学生の受け入れ開始
- ・連携共同講義の開講
- ・連携校担当講義の開講
- ・国内外連携大学院調査
- ・シンポジウムの開催
- ・大学院生交流会の開催

【令和 7 年度】

<組織体制整備>

- ・連携校拡大に関する業務
(修士課程・博士後期課程)
- ・修士課程連携教育プログラムの整備

<教育プログラムの運用

- ・共同講義「身体教育特講Ⅰ」
「身体教育特講演習Ⅰ」(修士課程)

<教育プログラムの拡充

- ・連携大学院交流会開催
- ・連携大学院受験者の拡大策の検討
- ・HP による広報活動

◆連携共同講義及び研究指導

令和 7 年度の新たな入学者は、修士課程 1 名だった。

連携共同講義については、修士課程では「身体教育特講Ⅰ」「身体教育特講演習Ⅰ」「身体教育特講Ⅱ」を実施した。博士後期課程については受講者がいなかったため、実施しなかった。

研究指導について、修士課程 1 名は自身の通学する大学以外の指導教員から研究指導を受け、学位論文構想発表会を兼ね、本学の院生や本教育プログラムを活用する院生と本教育プログラムに参画する教員の交流を深めるために連携大学院事業交流会を実施した。

2-2. 令和 7 年度連携大学院共同講義

本教育プログラムでは、異なる分野を専門とする大学の教員が担当教員となり、修士課程における体育学・スポーツ科学についての幅広い専門知識の養成を行うためにオムニバス形式の授業を行った。

2-2-1. 修士課程連携教育プログラム

身体教育特講Ⅰ

回	講義内容	担当教員
1	身体の特性(身体性)について	森
2	身体教育の手段について	梶
3	動機づけ等について	森
4	心のトレーニングについて	中本
5	身体意識の変容と運動技能について	坂本
6	運動指導とコツ・カンについて	金高
7	体力について	井福
8	アスリートの体力トレーニングについて	高井
9	健康づくりのための運動処方について	藤田
10	健康と生活習慣について	塩瀬
11	栄養について	石澤
12	自然環境での身体活動について(海洋スポーツ)	中村
13	トレーニングにまつわる心について	幾留
14	コンディショニングと障害予防について	廣津
15	まとめ	森

身体教育特講演習 I

回	講義内容	担当教員
1	身体の特性について	赤澤
2	動機づけについて	森
3	心のトレーニングについて	中本
4	運動指導とバイオメカニクスとコツ・カンについて①	金高, 永原
5	運動指導とバイオメカニクスとコツ・カンについて②	金高, 永原
6	運動指導とコツ・カンについて(柔道)	小澤
7	体力について	井福
8	球技スポーツにおける攻防の評価について	高井
9	健康と生活習慣について(調査と評価)	塩瀬
10	健康づくりのための運動処方について	藤田
11	運動指導とコツ・カンについて(水泳)	萬久
12	栄養について	石澤
13	トレーニングにまつわる心について	幾留
14	コンディショニングと障害予防について	廣津
15	自然環境下の運動について	中村
16	まとめ	森

◆令和7年度シラバス

＜身体教育特講Ⅰ＞

授業科目名 (ナンバリングコード)	身体教育特講Ⅰ【KR】 (223A2-1311)		授業形態	講義	授業科目区分	基礎科目 (※7-7生命科学)
担当教員名	森 司朗・井福 裕俊・坂本 将基・金高 宏文・中村 夏実・中本 浩輝・藤田 英二・高井 洋平・梅 ちか子・廣津 匡隆・塩瀬 圭佑・石澤 里枝・石走 知子・未 定				補助担当者名	
単位数	2 単位		履修年次	1年次	受け入れ人数	5名
授業の概要 及び達成目標	身体の特性（身体性）について理解を深めるとともに、身体を教育するための様々な手段について、心・技・体の観点から学び、生涯にわたって身体を育てていくための基礎的な能力を身につける。 【授業に含まれる活動】○・・・実施あり、×・・・実施なし、△・・・授業の進捗状況等、場合によっては実施あり グループワーク（△）、ディスカッション・討論（△）、プレゼンテーション・発表（△）、フィールドワーク（×）					
成績評価の方法	□学期末試験の成績（％） ■授業への取り組み状況（40％） ■レポート等の提出状況（60％）を総合的に評価する。					
成績評価の基準	上記の条件で総合的に評価する。授業への取り組み状況の評価は、自分の考えを適切に表現できるかを重視する。					
テキスト、教材 参 考 書	テキストは使用しない。資料を適宜、配布する。					
履修条件・ 関連科目	連携教育プログラム履修生は、同時開講予定の「身体教育特講演習Ⅰ【KR】」を履修すること。		備考(教員メッセージ含む)	本講義は、連携教育プログラム履修生の必修科目。原則として夏期休業中の約1週間程度とし、開講時期については、連携プログラム履修生の都合を優先する。なお、講義の順序が変更になる場合もある。		
オフィス・アワー	集中講義の期間中に各教員が対応する。					
授業計画						
回	担当教員名	授業内容			授業時間外の指導等 (予習、復習、レポート等課題の指示)	
1	森 司朗	身体の特性（身体性）について			身体の特性（身体性）についての復習（30分以上）	
2	梅 ちか子	身体教育の手段について			身体教育の手段についての復習（30分以上）	
3	森 司朗	動機づけ等について			動機づけ等についての復習（30分以上）	
4	中本 浩輝	心のトレーニングについて			心のトレーニングについての復習（30分以上）	
5	坂本 将基	身体意識の変容と運動技能について			身体意識の変容と運動技能についての復習（30分以上）	
6	金高 宏文	運動指導とコツ・カンについて			運動指導とコツ・カンについての復習（30分以上）	
7	井福 裕俊	体力について			体力についての復習（30分以上）	
8	高井 洋平	アスリートの体力トレーニングについて			体力トレーニングについての復習（30分以上）	
9	藤田 英二	健康づくりのための運動処方について			運動処方についての復習（30分以上）	
10	塩瀬 圭佑	健康と生活習慣について			健康と生活習慣についての復習（30分以上）	
11	石澤 里枝	栄養について			栄養についての復習（30分以上）	
12	中村 夏実	自然環境での身体活動について（海洋スポーツ）			自然環境での身体活動について（海洋スポーツ）の復習（30分以上）	
13	未 定	休養について			休養についての復習（30分以上）	
14	廣津 匡隆	コンディショニングと障害予防について			コンディショニングと障害予防についての復習（30分以上）	
15	森 司朗	まとめ			課題レポートの作成（3時間）	

＜身体教育特講演習Ⅰ＞

授業科目名 (ナンバリングコード)	身体教育特講演習Ⅰ【KR】 (226B2-2313)		授業形態	演習	授業科目区分	応用科目 (※7生命科学)
担当教員名	森 司朗・井福 裕俊・小澤 雄二・金高 宏文・中村 夏実・中本 浩輝・藤田 英二・高井 洋平・永原 隆・萬久 博敏・廣津 匡隆・赤澤 暢彦・塩瀬 圭佑・石澤 里枝・石走 知子・未定				補助担当者名	
単位数	2 単位		履修年次	1年次	受け入れ人数	5名
授業の概要 及び達成目標	「身体教育特講Ⅰ【KR】」で学んだ身体を教育するための様々な手段について、心・技・体に関する文献購読や調査・測定・討論等を通して理解を深め、生涯にわたって身体を育てていくための実践的な能力と指導力を身につける。					
成績評価の方法	□学期末試験の成績（％） ■授業への取り組み状況（40％） ■レポート等の提出状況（60％） を総合的に評価する。					
成績評価の基準	上記の条件で総合的に評価する。授業への取り組み状況の評価は、自分の考えを適切に表現できるかを重視する。					
テキスト、教材 参 考 書	テキストは使用しない。資料を適宜、配布する。					
履修条件・ 関連科目	同時開講予定の「身体教育特講Ⅰ【KR】」を履修すること。		備考(教員メッ セージ含む)	本演習は、連携教育プログラム履修生の必修科目。原則として夏期休業中の約1週間程度とし、開講時期については、連携プログラム履修生の都合を優先する。なお、演習の順序が変更になる場合もある。		
オフィス・アワー	集中講義の期間中に各教員が対応する。					
授業計画						
回	担当教員名	授業内容			授業時間外の指導等 (予習、復習、レポート等課題の指示)	
1	赤澤 暢彦	動機づけについて			動機づけについての復習（30分以上）	
2	中本 浩輝	心のトレーニングについて			心のトレーニングについての復習（30分以上）	
3	金高 宏文 永原 隆	運動指導とバイオメカニクスとコツ・カンについて①			運動指導とバイオメカニクスとコツ・カンについての復習（30分以上）	
4	〃	運動指導とバイオメカニクスとコツ・カンについて②			運動指導とバイオメカニクスとコツ・カンについての復習（30分以上）	
5	小澤 雄二	運動指導とコツ・カンについて（柔道）			運動指導とコツ・カンについて（柔道）の復習（30分以上）	
6	井福 裕俊	体力について			体力についての復習（30分以上）	
7	高井 洋平	球技スポーツにおける攻防の評価について			球技スポーツにおける攻防の評価についての復習（30分以上）	
8	塩瀬 圭佑	健康と生活習慣について（調査と評価）			健康と生活習慣の調査と評価についての復習（30分以上）	
9	藤田 英二	健康づくりのための運動処方について			健康づくりのための運動処方についての復習（30分以上）	
10	萬久 博敏	運動指導とコツ・カンについて（水泳）			運動指導とコツ・カンについて（水泳）の復習（30分以上）	
11	石澤 里枝	栄養について			栄養についての復習（30分以上）	
12	未 定	休養について			休養の調査と評価についての復習（30分以上）	
13	廣津 匡隆	コンディショニングと障害予防について			コンディショニングと障害予防についての復習（30分以上）	
14	中村 夏実	自然環境下の運動について			自然環境下の運動についての復習（30分以上）	
15	森 司朗	まとめ			課題レポートによるまとめ（3時間）	

◆令和 7 年度授業内

＜身体教育特講 I＞

担当教員	授業	講義内容
森	①身体の特性について	身体の特長（身体性）について、筋肉の不活動が脳に及ぼす影響や、第 2 の脳と呼ばれる腸と脳の関係、そして、第 3 の脳と呼ばれる皮膚と脳の関係、さらに、臓器間ネットワークなどをもとに理解を深めるとともに、アスリートやパラアスリートの身体性について解説した。
梶	②身体教育の手段について	学習指導要領および全国体力・運動能力、運動習慣等調査等のデータをもとに、子どもの体力低下や運動の二極化、スクリーンタイム増加などの現状を講義した。その上で、保健体育科教育学の視点から、「共生の視点」「個別最適な学び」「協働的な学び」を踏まえた身体教育の在り方を検討し、小学校から高校までの指導内容を体系的に捉えながら、生涯にわたり運動に親しむ資質・能力をいかに育成するかについて議論した。
森	③動機づけ等について	「なぜ人はスポーツ行動に参加するのか？」という動機づけの側面からスポーツ行動を考えることで、より効率的なスポーツ指導を行うことが可能になると考えられる。そこで本講義ではスポーツ行動に関して動機づけの視点からそのメカニズムについて理解を深める中で、内発的動機づけの重要性に焦点を当て検討した。
中本	④心のトレーニングについて	卓越したスポーツの運動行動には、「他者の動きをみて意図を理解する/予測する」という根本的な知覚・認知過程が重要となる。本特講では、「他者の動きをみる」際に機能する行為観察ネットワークという仕組みから、自己身体を通じた他者運動の理解や予測の可能性について論考した。
坂本	⑤身体意識の変容と運動技能について	スポーツ選手は、身体感覚と実際の身体の状態の乖離（主観と客観の解離）をしばしば経験する。本講義では、①感覚入力と身体意識の変容の関係性、②身体意識における局所と全体、③身体意識に影響を及ぼす時間の知覚、を中心に解説し、主観と客観の解離を埋めるための方策について考究した。
金高	⑥運動指導とコツ・カンについて	コツ・カンに着目した運動指導について概説した。そして、受講生が関わるプロバスケットボールチームの科学的サポートにおける関係者のニーズ把握（コツ・カンを含む）について議論を行った。
井福	⑦体力について	体力を維持・向上させることは、健康を維持・増進させる有効な方法であり、健康寿命の伸延につながる。本講では、健康関連体力（要素）と主要な生活習慣病の予防との関連を理解し、子どもから高齢者まで生涯にわたって体力の維持・向上を図るための体力トレーニングについて考えた。

高井	⑧アスリートの体力トレーニングについて	アスリートは長期間にわたって高度なトレーニングを行っていることから、トレーニング科学でいわれている普遍的なトレーニングプログラムでは効果が得られにくく、個性性の高いトレーニングを行っている。そこで本講義では、トレーニング科学的手法で得られた知見から普遍的な考え方と個性性の考え方について考究した。
藤田	⑨健康づくりのための運動処方について	高齢者における転倒は要介護や寝たきりに直結することから、その対策は喫緊の社会的課題である。そのため、高齢者に対する運動処方の中でも、転倒予防を目的とした平衡性のトレーニングに対する期待は大きい。しかしながら、その適切な運動量や頻度に関しては不明な点も多いことから、この講義では平衡性トレーニングをテーマに取り上げた。
塩瀬	⑩健康と生活習慣について	生活様式や社会環境の変化に伴い、生活習慣に関連した健康問題が深刻化している。本講義では、健康な生活に及ぼす生活習慣（とりわけ、運動・身体活動、食事、睡眠）の変容や、それに伴って生じた健康問題について理解を深めた。また、それらの問題を理解したうえで、生涯にわたり健康な生活を送るために必要となる生活習慣の在り方について検討した。
石澤	⑪栄養について	本講義では栄養の消化・吸収機能と運動パフォーマンスについて理解を深めた。特に、糖質の消化吸收、運動誘発性胃腸症候群、並びに胃腸症状を軽減させる食事についてディスカッションした。
中村	⑫自然環境の活用について（海洋スポーツ）	海洋スポーツを題材に、パドルリング種目やセーリング種目の特徴（Technology）を紹介し、水の抵抗や風など自然環境下での運動特性（Science）を説明した。さらに SUP 等の研究事例を基に運動効果（Science）を示すとともに、艇の構造（Engineering）や距離・速度・タイムなど運動の定量的把握（Mathematics）にも触れた。また、自然体験活動としての教育的意義（Arts）を解説し、自然を感じる感性や海洋文化への理解、環境保全や SDGs など社会的意義（Arts）について概説した。
幾留	⑬トレーニングにまつわる心理について	本授業では、トレーニングに関わる心理的要素について講義を行った。具体的には、動機づけと学習方略という 2 つの観点から主体的な学習のあり方を説明する自己調整学習理論に基づき、質の高いスポーツトレーニングについて解説を行った。
廣津	⑭コンディショニングと障害予防について	コンディショニング不良とスポーツ傷害の発生について、腰痛を取り上げた。腰痛の疫学、解剖学的特徴、腰痛の種類（屈曲型・伸展型）や特徴、運動連鎖の観点から腰痛発生の原因として重要な胸椎を含めた胸郭や股関節の機能不全および機能不全の解決法について詳細に解説した。
森	⑮まとめ	身体を教育するために、心・技・体の観点から各講義を通して学習した内容を振り返りつつ、補足説明により様々な手段に着目して身体を教育することの重要性についてさらに理解を深めた。それをもとに、身体の特性をふまえながら、様々な手段により生涯にわたって身体を育てていくための基礎的な能力を高めることについて解説した。

＜身体教育特講演習Ⅰ＞

担当教員	授業	講義内容
赤澤	①身体の特性について	身体の特性について、身体を動かす仕組みを各臓器とともに捉え、脳神経・骨格筋・呼吸循環・代謝機能について運動による応答と適応のメカニズムを概説した。特に、アスリートや高齢者による脳機能の変化について理解を深めた
森	②動機づけについて	競技場面での動機づけの適用の一つとしての目標設定について、競技者によって取り組まれてきた目標設定の方略に関して概観し、さらに目標設定の考え方に基づく具体的な方法に関して演習を行った。また、日常の取り組みの一つとして練習日誌の在り方やマインドセットの方法に関しても検討を行った。
中本	③心のトレーニングについて	スポーツにおける運動行動の学習には、「他者の動きをみて真似る」という方法が用いられる。本特講演習では、「他者の動きをみる」際に機能する自動模倣という仕組みから、観察によって生じる非意識的な自己運動と学習効率の関係について学習するとともに、自動模倣の測定や短期的な学習効果について演習を行った。
金高 永原	④⑤運動指導とバイオメカニクスとコツ・カンについて	受講生が関わるプロバスケットボールチームの科学的サポートにおける関係者のニーズに対応したバイオメカニクスの分析の内容やそのフィードバックについて議論した。さらに、受講生の研究テーマである「超音波エコー」による測定演習も行った。
小澤	⑥運動指導とコツ・カンについて（柔道）	柔道指導におけるコツ・カンについて、受け身や投げ技の技術構造を例に挙げ主に力学的観点から演習を行った。併せて、近年の動作分析技術の発達によって、柔道の技術構造の新しい見方や新しい技術の構築に繋がることについても考えた。
井福	⑦体力について	体カトレーニングを行うにあたり、自らの立位姿勢の特徴や体の歪みを理解しておくことは重要である。本演習では、矢状面での写真撮影による立位姿勢のチェックや、閉目長座歩行・閉目足踏みによる体の歪みのチェックを行い、自分の体の特徴を理解した。また、体側伸ばしのストレッチングによる体の歪みの矯正を行い、効果を判定した。
高井	⑧球技スポーツにおける攻防の評価について	受講者が1名で2者間の攻防ができなかったことから、本講義ではスポーツパフォーマンスに関わる力調節能力の評価方法と筋活動量を定量するための筋電図の研究手法について、機器の使い方、実験の際の留意点（プロトコルなど）、分析方法について学んだ。
塩瀬	⑨健康と生活習慣について（調査と評価）	生活様式や社会環境の変化に伴い、生活習慣に関連した健康問題が深刻化している。本講義では、運動・食事・睡眠等の生活習慣と健康の関連についての著書や研究論文を抄読した。研究論文の内容について発表・議論を行い、健康づくり運動・栄養調査に活用できる研究手法に関する理解を深めた。

藤田	⑩健康づくりのための運動処方について	本講義では平衡性の評価法について実技を通して学び、それぞれの手法に大きく影響する身体機能の要因ならびに長所・短所について理解を深めた。その上で、各指導現場においてよく用いられている平衡性評価の現状について学んだ。
萬久	⑪運動指導とコツ・カンについて（水泳）	水の物理特性（浮力・抵抗・水圧）を基に、効率的に「浮く・進む・呼吸」を行うための力学的原理を講義し、実技を通じてそれらを自身の主観的な感覚へと落とし込むプロセスを経験させた。学生は、下半身の沈みやすさといった個々の身体的特徴を把握した上で、補助具の活用等を通じた試行錯誤を繰り返し、普遍的な理論を個別の身体知へと統合させることができた。特に苦手な技術ほど科学的根拠に基づいた正しい理解が不可欠であり、理論という土台があって初めて独自の感覚が研ぎ澄まされることを学ばせている。原理の理解と実践の反復を両立させることが、効果的な指導法につながるという深い洞察を得ることができた。
石澤	⑫栄養について	本講義では栄養の消化機能・腸内細菌と運動パフォーマンスについて最新の英語論文の抄読を通して、アスリートと腸内細菌についての理解と英語論文の読み方についての理解を深めた。
幾留	⑬トレーニングにまつわる心理について	本授業では、スポーツ版自己調整学習尺度を用い、主体的な学習の程度に関して自己評価を含む演習を行った。具体的には、尺度得点に基づく自身の学習活動を振り返った。加えて、スポーツ心理学的な観点での研究の進め方についても紹介し、自身の研究内容についてディスカッションを行った。
廣津	⑭コンディショニングと障害予防について	コンディショニング不良とスポーツ傷害の発生について、Jones 骨折（第5 中足骨疲労骨折）を取り上げた。Jones 骨折の疫学、解剖学的特徴、Jones 骨折のリスクファクター、傷害予防の重要性、発症後の対処法などを詳細に解説した。また、ストレッチのする際の注意点についても解説した。
中村	⑮自然環境下の運動について（海洋スポーツ）	海洋スポーツ活動時の準備から片付けまでの実践と注意事項を確認し、砂浜からの安全な出着艇の方法を実習した。また、パドルスポーツとして SUP を取り上げたが、波のある環境であったことで波乗りを体験に途中変更し、気象と運動種目選択の関係を実践的に学んだ。
森	⑯まとめ	身体を教育するために、心・技・体の観点から各演習を通して学習した内容を振り返りつつ、補足説明により様々な手段を実際に活用して身体を教育していくことの重要性についてさらに理解を深めた。それをもとに、実践的な能力を高めるとともに、指導する立場において留意すべきことについても理解を深めた。

2-3. 連携大学院事業交流会

令和8年3月5日、連携大学院教育プログラムを活用する大学院生および本学修士課程・博士後期課程の大学院生を対象として研究に関する意見交換等を行い、今後の研究や就職活動の促進につなげることを目的とした「連携大学院事業交流会」を開催した。

今年度は、修士課程の学位論文構想発表会を併催し、様々な交流を深めるフリーディスカッションも行った。

◆連携大学院交流会ポスター

連 携 大 学 院
事業交流会

2026年3月5日(木)

13:00~16:30

■ 会場:大学院棟2階演習室IVまたはMicrosoft Teams

■ 発表
 入江 晴菜さん(修士課程1年)
 林 剛志さん(修士課程1年)
 堀 昂太郎さん(修士課程1年)
 川口 貴晴さん(修士課程2年)

※オンライン参加は右記のQRコードからお申込ください。

会場に直接お越しになる方は、事前申込は不要です
ぜひお気軽にご参加ください

◆連携大学院教育プログラム交流会スケジュール

令和8年3月5日（木） 司会：熊本大学 坂本先生

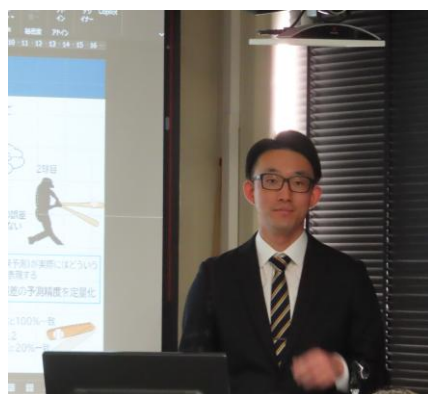
13：00～13：30	開会・アイスブレイク
13：30～14：00	入江 晴菜さん ※学位論文構想発表会と併催
14：00～14：30	林 剛志さん ※学位論文構想発表会と併催
14：30～15：00	堀 昂太郎さん ※学位論文構想発表会と併催
15：00～15：30	川口 貴晴さん 発表
15：30～16：15	フリーディスカッション
16：15～16：30	閉会

◆学位論文構想発表会



●ウェアラブル機器を用いた筋疲労の推定アルゴリズムの構築

入江 晴菜さん（鹿屋体育大学大学院 修士課程1年）



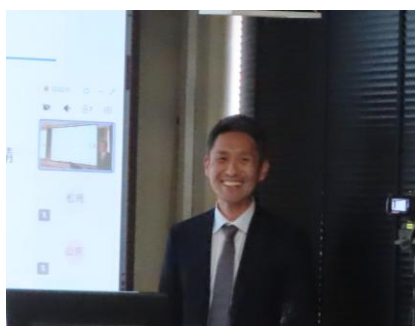
●野球打者におけるコンタクト精度を向上させる内部過程の
解明

林 剛志さん（鹿屋体育大学大学院 修士課程1年）



●野球における打撃動作のタイミング調節に関する研究

堀 昂太郎さん（鹿屋体育大学大学院 修士課程 1 年）



●修士課程を修了して

～修士論文を書き終えるまでの経験談～

川口 貴晴さん（鹿屋体育大学大学院 修士課程 2 年）

<交流会の様子>



司会の熊本大学 坂本教授



森教授による開会の挨拶



自己紹介を兼ねたアイスブレイク



フリーディスカッション（修士課程1年の入江さん）



会場の様子



熊本大学 井福教授による閉会の挨拶

<交流会アンケート>

令和7年度 連携大学院事業交流会アンケート

令和7年度連携大学院事業交流会後、今後の交流会運営の為、アンケートを実施しました。

【日時・場所】

令和8年3月5日(木) 13:00～16:30

大会議室またはオンライン

【アンケート】

参加全員に交流会実施後、formsにて回答

【学生参加人数】

	交流会参加者	アンケート回答者
会 場	22	8
オンライン	2	0
計	24	8

回答率 33 %

【アンケート結果】

1. 今回の交流会に参加してよかったと思いますか

全く思わない	あまり思わない	そう思う	大変そう思う
0	0	2	6

2. 交流会の開催時期は適切だったと思いますか

思う	思わない
8	0

3. 交流会の開催時間は適切だったと思いますか

思う	思わない
7	1

4. 【思わないと回答いただいた方】適切と思う時間をお聞かせください

・所要予定時間が3時間半と長く、参加に躊躇した方もいたのではないかと。

5. 交流会で活発な意見交換ができるようなプログラムとして、アイスブレイク、ポスターを掲示してのフリーディスカッションを実施しました。このプログラムに関するご意見をお聞かせください

- ・参加者に対してポスター数が少ないため、あふれてしまっていたので、フリーディスカッション前に、全体を一度閉会してもよいのではないかと。
- ・発表者と議論を交わす時間が限られていたため、参加者をグループに分けて、時間でローテーションしながらのグループディスカッション形式でもよかったのではないかと。
- ・ポスターがあると発表者と気軽に意見交換ができて良かった。
- ・これまでにない試みで活気のある会になっていた。
- ・研究内容に関して、ご指導していただけたことはとても有意義な時間となった。
- ・学校生活の話ができたことも良かった。

6. 今回の学論文構想発表会との併催の試みについて、ご意見をお聞かせください

- ・とても有意義だった。
- ・構想発表会と併催したことにより、参加者が増加したと思うので良かった。
- ・連携大学院だと鹿屋の修士の学生と会う機会もないが、併催によって会えたのでよかった。
- ・他大学の学生の方の研究が聞けるのは、学会的な要素もあってよかった。
- ・鹿屋市まで行くことも大変なので、同時開催で良かった。
- ・資料も構想発表会までに準備し、それなりに発表内容を練っていたので、説明もしやすかった。

7. 交流会全体を通しての感想及び意見等について、お聞かせください

- ・有意義な時間となった。
- ・普段交流しない方と交流できたのは非常に良い機会だった。
- ・前回よりも会場の参加者も多く、活発な意見交換ができたのでよかった。
- ・研究のみならず、学位を取るにあたっての話が聞けたのは、多様な方がいる連携大学院ならではのよさだと感じた。
- ・構想発表としての今回の発表時間は十分に取られている。質問もたくさん飛び交う中で、色々な角度から意見を聞くことができ、楽しさを感じた。

2-4. 広報活動

2-4-1 連携大学院教育プログラム進学希望者説明会の実施・開催

本年度は、宮崎大学、熊本大学の博士後期課程および修士課程への進学を検討している院生、学部生、社会人を対象に本教育プログラムの説明会を行った。なお、説明会参加者の募集方法について、今後の課題として引き続き考えていく必要がある。

説明会では、連携大学院教育プログラムのシステム紹介、鹿屋体育大学の紹介、入試までの流れと費用等の説明を行ったうえで、参加者からの質疑応答に対し、教員または職員が対応する（オンライン）という形で行われた。

<令和7年度>

①宮崎大学での開催分（現地とオンラインのハイブリッド）

参加者：学部生1名

説明者：森司朗教授

陪席者：塩瀬准教授、修了生1名 他

質疑応答：

- ・学費等の支援内容について



（宮崎大学での説明会の様子）

②熊本大学での開催分（オンライン）

参加者：社会人1名

説明者：森司朗教授

陪席者：坂本教授

質疑応答：

- ・修士課程学生への学会旅費支援、オンラインでの授業受講について

2-4-2. ホームページによる広報活動

本プログラムの情報をより周知するために、本学のホームページに掲載されている内容を見直し、更新した。

日本唯一の国立体育大学

HOME / 学部・研究科 / 連携大学院教育プログラム（修士課程・博士後期課程）

連携大学院教育プログラム（修士課程・博士後期課程）

連携大学院とは キャリアパス 修了生の声 教育プログラムの概要 次世代A.C.E.博士人材育成強化プロジェクト

連携大学院とは

地元の大学に残って活動できます！

鹿屋体育大学の大学院生として在籍しながら、連携協定校に研究活動の基盤を置くことができます。

また、遠隔システム（Webex）でのオンライン指導を受けることができます。地元にいながら、鹿屋体育大学の教育・研究活動を行うことが可能です。

博士（体育学）を目指しましょう！

複合領域である体育学・スポーツ科学についての高度で専門的な知識を学びながら、鹿屋体育大学大学院の博士（体育学）の学位取得を目指します。

未踏の学際領域や複合領域を開拓！

「競技スポーツ」又は「生涯スポーツ」の分野において、これまでになく学際領域や複合領域を開拓し、研究成果を実践に応用できる高度な専門性と実践的な指導力を有する指導者を養成することを目的としています。

従来の、専門化した研究領域における分析的な研究を行う研究者の養成とは一線を画しています。

様々な専門領域の教員から学べます！

複数の体育・スポーツ・健康系の研究科を有する大学院の各研究科が連携・協力して教育・研究指導を行います。鹿屋体育大学のみならず、他の大学に所属する様々な領域を専門とする教員から学ぶことが可能です。

キャリアパス

保健体育科教員

教育学部等との連携を通じて、小中学生の体育指導に対応できる高い専門性を持った教員となることができます。

スポーツコーディネーター

スポーツに関する幅広い知識を修得することによって、スポーツを通じて様々な人・組織と共に新たな価値を立ち上げる力を養うことができます。

クラブチーム等の指導者

スポーツコーチングに学際的な研究成果を活用することによって、指導理論と実践力を兼ね備えた指導者となることができます。

スポーツマネジメント

最新のマネジメント理論と多岐に渡る学識を学ぶことにより、スポーツを新たな視点で捉え直す力を養うことができます。

スポーツを通じた健康づくりの専門家

子どもの体力低下、高齢者の健康維持などの社会における様々な課題に対し、スポーツを通じて解決する力を養うことができます。

進学（修士の場合）

複数の大学に在籍する教員から研究指導を受け、幅広い視点から諸問題の解決を目指すことのできる博士号（体育学）取得者を目指すことができます。

研究者・大学教員

様々な分野を学ぶことによって、体育・スポーツ科学全般に対応できる研究員や大学教員として活動できます。

修了生の声

中山 貴文さん

連携大学院教育プログラム博士後期課程 修了生
九州中央リハビリテーション学院 理学療法学科 副学科長

詳細を確認する

島中 智恵さん

連携大学院教育プログラム博士後期課程 修了生
青山学院大学 教育人間科学部研究科心理学専攻 特任准教授

詳細を確認する

2-5. 委員会報告

2-5-1. 令和 7 年度の事業体制

令和 7 年度体育学・スポーツ科学連携大学院教育プログラムワーキンググループ委員名簿、同開発委員会名簿、同学外委員名簿は以下の通りである。

今年度は、鹿屋体育大学の教授である山田委員が退職され、また職員では、6 月末で陪審員の中野教務課教育企画係長が異動、3 月末で中野さつき事務補佐員が退職となり、新たに陪審員として、松村教務課教育企画係長と山崎事務補佐員が加わった。

＜令和 7 年度体育学・スポーツ科学連携大学院教育プログラムワーキンググループ委員名簿＞

	氏 名	所 属 等
委員長	森 司 朗	スポーツ人文・応用社会科学系 教授
委員	小 澤 雄 二	スポーツ武道・実践科学系 教授
委員	藤 田 英 二	スポーツ生命科学系 教授
委員	中 本 浩 揮	スポーツ人文・応用社会科学系 教授
委員	幾 留 沙 智	スポーツ人文・応用社会科学系 准教授
委員	関 朋 昭	スポーツ人文・応用社会科学系 教授
陪席	元 明 勇 二	教務課課長
陪席	松 村 周 平	教務課教育企画係長
陪席	山崎 奈緒美	事務補佐員

＜令和 7 年度体育学・スポーツ科学連携大学院教育プログラム開発委員会名簿＞

	氏 名	所 属 等
委員長	森 司 朗	スポーツ人文・応用社会科学系 教授
委員	前 田 明	理事・副学長
委員	金 高 宏 文	スポーツ武道・実践科学系 教授
委員	小 澤 雄 二	スポーツ武道・実践科学系 教授
委員	和 田 智 仁	スポーツ人文・応用社会科学系 教授
委員	藤 田 英 二	スポーツ人文・応用社会科学系 教授
委員	関 朋 昭	スポーツ人文・応用社会科学系 教授
委員	中 本 浩 揮	スポーツ人文・応用社会科学系 教授
委員	幾 留 沙 智	スポーツ人文・応用社会科学系 准教授
陪席	元 明 勇 二	教務課課長
陪席	松 村 周 平	教務課教育企画係長
陪席	山崎 奈緒美	事務補佐員

＜令和 7 年度体育学・スポーツ科学連携大学院教育プログラム学外委員名簿＞

	氏 名	所 属 等
委員	井 福 裕 俊	熊本大学 大学院教育学研究科 保健体育科教育 教授
委員	坂 本 将 基	熊本大学 大学院教育学研究科 保健体育科教育 教授
委員	塩 瀬 圭 佑	宮崎大学 教育学部保健体育 学校教育課程 准教授
委員	石 走 知 子	鹿児島大学学術研究院総合科学域総合教育学系 総合教育機構 共通教育センター 体育・健康教育部門 准教授
委員	池 田 孝 博	福岡県立大学大学院人間社会学研究科子ども教育専攻 教授

2-5-2. 令和 7 年度の事業概要

令和 7 年度は、本学教員によるワーキングと開発委員会、並びに本学教員と連携大学の教員による協力者会議を定期的に開催し、連携共同講義、連携校の拡大、連携大学院交流会等について検討を行った。

- (1) プログラム連携促進業務：連携校拡大のために本教育プログラムの説明を行い、協定締結に向けた取り組みを継続している。
- (2) 修士課程連携教育プログラム： 共同講義「身体教育特講Ⅰ」「身体教育特講演習Ⅰ」「身体教育特講ⅡA【KR】」「身体教育特講演習ⅡA【KR】」「身体教育特講ⅡB【KR】」を実施した。
- (3) 連携大学院交流会の実施：本学博士後期課程の大学院生、連携大学院教育プログラムを活用する大学院生、本教育プログラムに参画する教員を対象として、本年度は学位論文構想発表会を併催し、修士課程の学生による発表や研究に関する意見交換などを行った。
- (4) 広報活動の実施：本教育プログラムを利用した本学修士課程・博士後期課程への入学希望者を募集するために、本学教員、教務課職員が熊本大学、宮崎大学の学生、社会人を対象に大学説明会を開催した。
- (5) 報告書作成業務：令和 7 年度の本プロジェクトの実施内容を報告書としてまとめた。
- (6) 遠隔授業の支援：Webex、Microsoft Teams を利用した遠隔授業開講時のトラブルの対応を行った。

＜令和 7 年度会議実施表＞

日 時	会 議
R7 年 5 月 27 日	第 1 回 ワーキング (令和 7 年度事業計画および予算について等)
7 月 17 日	第 1 回 体育学・スポーツ科学連携大学院教育プログラム開発委員会 (予算、論文博士取得支援プログラムの申請について、連携大学院交流会 等)
7 月 18 日	第 1 回 体育学・スポーツ科学連携大学院教育プログラム協力者会議 (予算、論文博士取得支援プログラムの申請について、連携大学院交流会 等)
9 月 20 日	第 2 回 ワーキング (共同講義、連携大学院交流会、説明会実施報告 等)
10 月 29 日	第 2 回 体育学・スポーツ科学連携大学院教育プログラム開発委員会 (連携大学院交流会、本年度の授業実施状況について 等)
11 月 18 日	第 2 回 体育学・スポーツ科学連携大学院教育プログラム協力者会議 (連携大学院交流会、本年度の授業実施状況について 等)

3.令和 8 年度事業実施計画

3. 令和 8 年度事業実施計画

令和 8 年度の事業実施について以下を計画している。

令和 8 年度は、修士課程、博士後期課程に関する連携教育プログラムの更なる充実した運用を進める。また、九州地区における修士課程、博士後期課程の連携の拡大を引き続き図ると同時に、九州地区以外の大学への展開も模索。さらに、連携大学院在籍者への指導の強化や交流を図り、今後の受験者の拡大策を検討していく。

教育プログラムに関しては、修士課程連携共同講義「身体教育特講Ⅰ」「身体教育特講演習Ⅰ」の内容と運営の見直し、博士後期課程の評価システム（ループバック評価）の作成を進めていく。

体育学・スポーツ科学連携大学院教育プログラム開発プロジェクト

プロジェクト実施報告書

2026 年 3 月 31 日 発行

編 著 者：森 司朗

発 行：体育学・スポーツ科学連携大学院教育プログラム開発プロジェクト事務局

住 所：〒891-2393 鹿児島県鹿屋市白水町 1 番地

TEL&FAX：0994-46-5128
